

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造 その二

山 田 和 人

田中組に伝承されているからくり「傀儡師」は、大人形の傀儡師本体と、舟に固定されている小人形と、別のからくり台にセットされている知盛人形からなる。前稿では、絵画資料と田中組の傀儡師の人形との比較検討を試みながら、傀儡師人形本体と知盛人形のスライド機構を中心に、田中組傀儡師のからくりの構造をまとめた（拙稿「田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造」『同志社国文学』四十号 平成六年三月）。本稿では、小人形及び知盛人形の構造と操作方法を中心に分析することを通して、竹田からくり「傀儡師」を探る手掛かりとしたい。この田中組の傀儡師が竹田からくりの構造や動態について明らかにしうる、現存するほとんど唯一の例であるという点から、できるだけ多面的にかつ調査の結果の早期報告の必要から、いささか調査の内容が前稿と重なる点についてはご容赦願いたい。

一昨年十月九日、本学至誠館33番教室において、「竹田からくりの世界―田中組「傀儡師」の復元上演」と題して、田中組の皆さんによる「傀儡師」の実演、及び人形の精査を通しての傀儡師の動態の復元上演を試みた。本稿では、その準備の一環として、田中組の皆さんの協力により、復元の対象となる義経、弁慶、知盛のそれぞれの人形の衣裳を脱がせて、その内部構造を調査する機会を得たので、その際に撮影した写真資料を中心に報告を進めたい。なお、復元上演によって、明らかにしえた点についても簡単に触れておきたい。

ここで、本論に入る前に断っておかなければならないのは、小人形が制作当初の部材をそのまま用いているものではないということである。おそらく、当初のまま現在も使用されているのは、首と手足の部分だけであろう。それ以外は、折りに触れて修理や補修、作

り替えが施されており、新しい部材になっている。しかし、だからと言って、これらの人形が傀儡師の制作当初の構造を推量する資料として価値を有さないというわけではない。

からくり人形は生きて上演され続けるかぎり、故障、破損の度に、修理・修復を繰り返さなければならなくなるのは当然であり、そうして修復されることを通して長年にわたり上演を続けることができるのである。からくりを担当する係は、そうした修理・修復を含めて、人形の調整を上演の度に行なわなければならない。糸が切れたり、無理な操作によって、一部が破損したり、という不測の事態に備えなければならないのである。それがからくり担当者の役割である。田中組に伝承されてきた傀儡師もその例外ではない。そうしたからくり人形の伝承の実態に即して言うならば、からくり人形の調査・研究にとって重要なのは、その部材の新旧ではなく、その人形の動作を生み出す内部構造の検討である。

傀儡師の人形は前稿でも指摘したように、かつての竹田からくりの「傀儡師」の動態とも一致しており、詳細に調査・検討を加えていくと、その構造は竹田からくりの演技を可能にするだけの十分な条件を備えている。そうしたことを前提にして、調査・検討を加えた結果として、以下に小人形の内部構造の検討に入りたい。

一 義経人形の内部構造

義経人形は典型的な箱胴形式である。これは他の小人形においても同様である。からくり人形の構造の基本は箱胴形式であり、その箱胴に人形の各部位の動作を可能にする部材を固定したり、その中の空間を利用して差し金や上下のスライド機構をはじめとして操作糸を通したり、制御のための装置が仕込まれている。この構造は人形の大小には関係なく、ほとんどのからくり人形に共通している。

以下に、こうした箱胴に仕込まれた各部位を写真資料を提示しながら、義経人形の動作別に検討していきたい。

首の左右

義経人形の首の付け根には左右に穴が明けられており、操作糸が交差するように張られている（写真1）。左の糸を引けば人形の首は左を、右の糸を引けば人形の首は右を向くように作られている。首の左右の動作は、こうした首の下に通された糸で操作されることが多かったと考

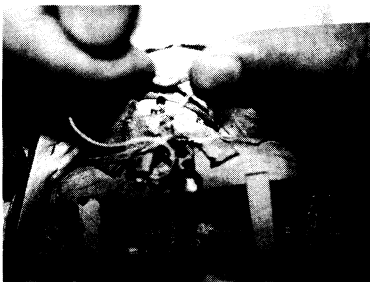


写真1

えてよい。因みに、こうした糸の存在もしくは糸を通した糸を確認できない場合には、首の動作は期待できないことが多い。この操作で糸は、前稿でも指摘したが、義経人形の固定台の下に結び付けられて使用されなくなっていたが、今回の復元上演の際に、元の糸に新たに糸を付け足して、それを舟の底から操作することで、かつては下遣いで首を動かすことができたことを確認した。

腕の上下

義経の腕は、箱胴の側面に左右それぞれが串で固定されており、腕の付け根に明けた穴に結び付けられた糸を引くことで上に上げる。糸を放すと腕は下がる（写真2）。

二の腕には小さな穴が明けられ、そこに糸が通されて、その糸が箱胴の側面に結び付けられている（写真2）。

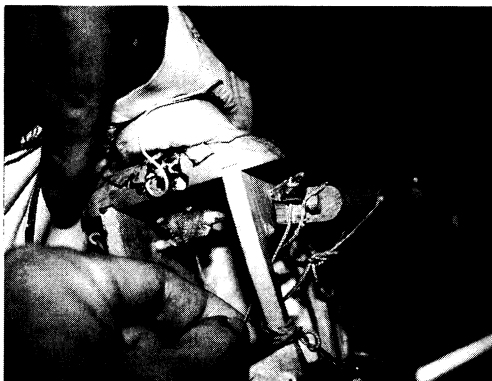


写真2

これは、腕がこれ以上、上がらないようにするための制御用の糸で、いわゆるストッパーの役割を果たしている。これによって、腕が上昇した時に一定の高さで停止し、その勢いが後述する肘の動きに連繫することになる。そうした反発力を誘発するためのストッパーである。

腕は肘の関節で曲がるように作られているが、それを操作するための糸はない（写真3）。実際には、腕を振り上げると、その上昇する勢いで最上部で前述したように、一定の高さで急停止し、そのために自然に関節が曲がって、そこから刀を振り下ろすようにして腕が伸びていく。それだけ刀を振り下ろす自然な動作に近くなる。

このように、義経人形は元来、首の左右及び両手の動きが四本の糸の操作で実現されていたことがわかる。そして、これらの糸が、



写真3



写真4

人形の箱胴の基盤の穴に通されて、その糸が固定台から舟の底を通って下遣いで操作される。基盤の前部の二本は首の動作、後部の二本は腕の上下の動作を可能にしている（写真4）。

ところで、海上に出現した知盛の亡霊に立ち向かう場面で、義経が刀を振り上げるという設定で義経の腕は上

下する。現在の演技では、両手が同時に上下するのが、左右の腕がそれぞれに動作できるように、別々に串で固定されており、それを布で巻き付けて固定している（写真1・2）。現在、腕が同時に上下するのは、この二本の串を固定した結果である。その強引な固定の仕方からみて、以前は二本の腕が別々に動作していたと考えるのが自然である。竹田からくりの「傀儡師」の絵画資料には、義経

は刀を持つ右手を振り上げて描かれているが、田中組の「傀儡師」も現在の演技とは異なり、それらの絵画資料と同様の演技がなされていたことが推察されるのである。もちろん、かつては弁慶人形と同様、左右の腕が同時に上下していたのかもしれないが、わざわざ左右別々に動作するように腕の構造を串式に変更するというのも、不自然なように思えるがいがであろう。むしろ、からくり人形の伝承過程での変化として、伝承者にとって、人形の操作が難しくなってくると、操作の簡略化が生じてくる。その結果、別々に動いていた両手が固定されて、さらに両方の糸を結び付ければ一本の糸で操作できることになり、人形の操りは簡単になる。首の動きも難しくなってくると、操作糸を人形の固定台の底に結び付けて固定して、その動作を止めてしまう。こうしたからくり操作の技術伝承の常から言えば、わざわざ左右の腕を複雑に操作できるように工夫を加えていくというのは、いささか不自然に思えてくるのである。

このように人形の内部構造を精査すると、元来の人形の動作が見えてくる。ここに、からくり人形の調査のポイントがある。調査と動態研究が不可欠に結び付いていると言えよう。なお、今回の復元上演では、義経の首が左右に回ることを実際に示した。しかし、それがどういう演技であったのかは、不明である。

二 弁慶人形の内部構造

腕の上下及び左右

弁慶人形の腕は上下左右に動くところが、義経人形とは異なる。

そのために次のような構造になっている（写真5）。

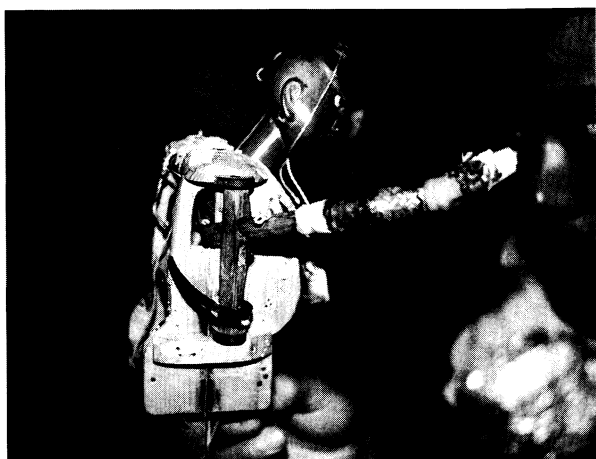


写真 5

で、腕が内側に絞り込まれて、弁慶が数珠を押し揉む、両手を打ち合わせる演技が可能になっている。そして、絞り込まれた腕が自動的にもどるように、ばねが主軸と箱胴の間に使用されている（写真6）。

腕の付け根には上下の動きのための操作糸が結び付けられており、糸を引くと腕が上がるようにセットされている。ただし、現在は、後述するように本体が上昇するときにそれに連動してこの糸が引っ張られて腕が自動的に上がるように、弁慶人形を固定してある舟の一部に二本の糸を結び付けている。それゆえ、この糸を単独で操作することはない。もちろん、この糸を単独で操作すれば、弁慶の腕を上下させることは可能であり、それだけさまざまな演技の可能性も想定できる。

からくり人形で腕の上下左右の動きを演技の中に取り入れるためには、原則的にここで見たような基本構造が必要である。なお、操作の仕方によって、こうした構造をもっているからくり人形は、腕の回転も可能になる。もちろん、弁慶人形の場合には、そうした腕の回転は演技としては必要ではない。

首の左右及び上下

弁慶人形にも、義経人形と同じ首の付け根に左右に交差させた操作糸が張られている。その操作も義経人形と同じである。首が左右

し込まれた主軸を上下の軸受けに固定している。この腕を差し込んだ主軸は、上下の軸受けの間で左右に回転するようになっており、弁慶の腕のほぼ中央に穴を明けて結び付けられた操作糸を引くこと

にそれぞれの糸の操作によって回転する。従来、田中組の弁慶人形の演技では首の動きは認められなかったのだが、内部構造を改めて精査した結果、首の左右の回転のための操作糸が発見された。

今回の復元上演では、発見された操作糸に新たに糸を結んで、実際に首

を動かすことができることを示した。ただし、それがどういう演技の中で用いられたのかについては不明である。

また、弁慶人形の首は義経のそれとは異なり、首が後方に反り返るように作られている。首の上下と言っても、この場合、からくり人形によく見られるうなずきとは異なり、首は後方にのみ動く。弁

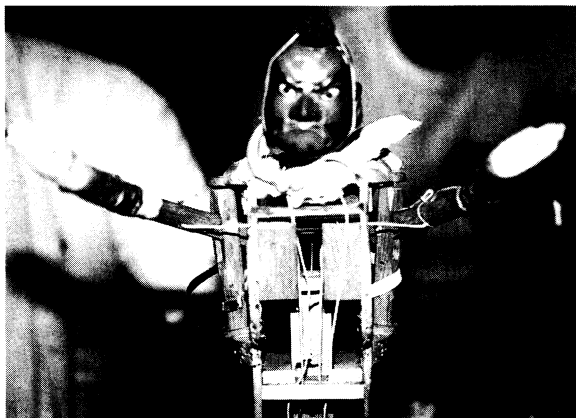


写真 6

慶の首は文楽人形と同じ構造になっており、耳の後方左右に貫通している竹の横栓を軸にして、首が後方に反り返るように造作されている（写真7）。そして、首の後方に結び付けた糸が首に沿って抜けており、肩板に固定されている。元来、この糸は固定されていたものであるのか、あるいはかつてはこの糸の操作によって、弁慶人形が数珠を押し揉む演技をする時に、首を傾けたものであるのか、現時点では確認できない。また、そうした動作はどのような演技のなかでなされたものであるのか、これについても伝承が途切れている以上、それを実証的に示すことはできない。ただ、前稿でも触れたように、弁慶が数珠を押し揉む所作をするときに、その持りの激しさを表現するために、首を上下に動かす仕草は効果的であり、両手を打ち合わせ所作とともに知盛の亡霊を退散させるに十分な迫力があつたものと、推量させられる。



写真 7

この首から伸びる胴串部分が箱胴を左右に渡した支柱にはめ込まれており、その横に渡した支柱の左端にぜんまいが巻かれており、人形の首を一定の位置に固定している。このぜんまいで首が反り返っても元に戻るようになっているのである。首の上下運動のある人形の場合、こうした固定用のぜんまいが仕込まれていることが多い。このぜんまいの有無が必ずしも首の動きの操作を予想させるものとは言えないかもしれないが、やはり、その機能と構造から言えば、弁慶人形の首もやはり、糸の操作で後方に反り返る動作をしていた可能性は高い。ただ、弁慶人形の動きはきわめて激しいので、その動作の振動で首が結果的に動くように作られている可能性もある。

本体の上下

弁慶は、知盛の亡霊を縛り伏せるために、立ち上がった数珠を押し揉み、両手を激しく打ち合わせる。こうした演技は、弁慶人形本体が上下する機構を備えていなければならない。弁慶人形の人形の箱胴の中央には、四角の木枠が納まっており、その木枠の中を弁慶人形の支柱となる柱が通っている。この支柱をスライドして弁慶の箱胴全体が上下するようになっていいる。この支柱の後方には、操作糸の納まる溝が切られている。この糸を引くと、人形の箱胴部分が上昇して弁慶が立ち上がる。弁慶人形の支柱の下部には、滑車が取り付けられており、糸はこの滑車を通して操作される。

弁慶人形の操作

用の糸は舟の底に三本が通っており、二本が左右の腕を絞り込んで両手を打ち合わせて数珠を押し揉む所作をさせる。この舟底を通した二本の糸を下で結んで、それを引いている。

そして、あとの一本が本体を上下させる。弁慶人形の腕の上下は、人形本体が引き上がるときにそれに連動して上昇するように左右の二本の操作糸を、弁慶人形の固定したある舟の骨組みの一部に結び付けてある（写真8）。人形本体が上昇すれば、当然、腕を引き上げる糸が引かれて、弁慶の両手が上がる。

この三本の引き糸は、舟の底部に付属している木製の三個の滑車を介してそれぞれ舟の下に下ろされている。弁慶人形は、動きが激

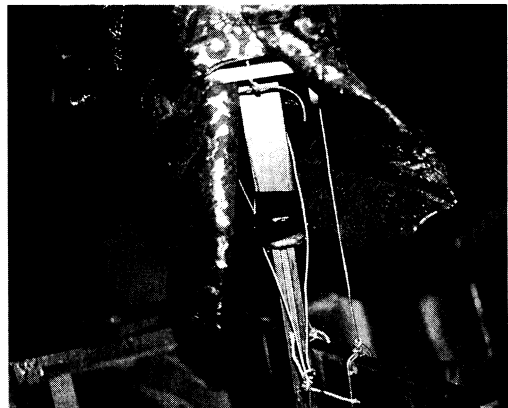


写真 8

しいので、糸に対する摩擦も大きくなる。そのためにこのように滑車が装備されているのである。

三 舟子人形の内部構造

首の左右

義経、弁慶と同様の仕組みで舟子の首が動作する。この人形の首だけは、現在の伝承でも舟を漕ぎながら首を左右に振る。そのために引き糸が二本、舟の底に通じている。この人形もあわせて傀儡師の人形は、傀儡師本体も含めて、すべて首を振る所作を演じていたことになる。

本体の前後

舟子の演技は、舟が姿を現してから、櫓を握って舟を漕ぐところにある。両手は、櫓に固定されており、舟子人形の前後運動によって、舟を漕ぐ所作が展開される。舟子人形の支柱の穴に通された二本の糸がそれぞれ舟底に通じており、この糸を引くと人形が起き上がったたり、倒れたりする。この糸の引き加減で舟子の漕ぎだす勢いに変化を付けることができる。伝承によれば、知盛の亡霊が海に没してから、急いでその場を立ち去るべく勢いよく櫓を漕ぐように演じたという。そして、人形の支柱が糸を引いた勢いで折れたりしないように、ストッパーの役割をする竹製のばねに結び付けた糸が支

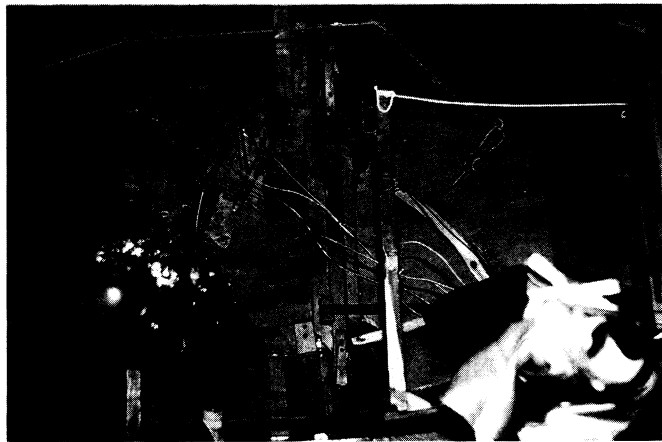


写真9

柱に固定されている。
現在は竹をばねに使用しているが、これもおそらくは鯨のひげが用いられていたのではないかと推量している（写真9）。

さらに舟子人形には、櫓を伸縮させるための、糸が必要であった。すなわち、義経、弁慶、舟子の人形は、三つ折りの状態で畳み込まれているので、舟子の櫓を格納するために、通常は櫓を縮めている。そこで、舟が伸びて全体が現われたときに、舟子の持つ櫓が糸の操作で写真のように伸び

るように作られており、この舟弁慶の場面が終わると、縮んで元の状態に戻る（写真10）。

この槽の伸縮用の操作糸を合わせて、舟子人形は六本の糸を操作

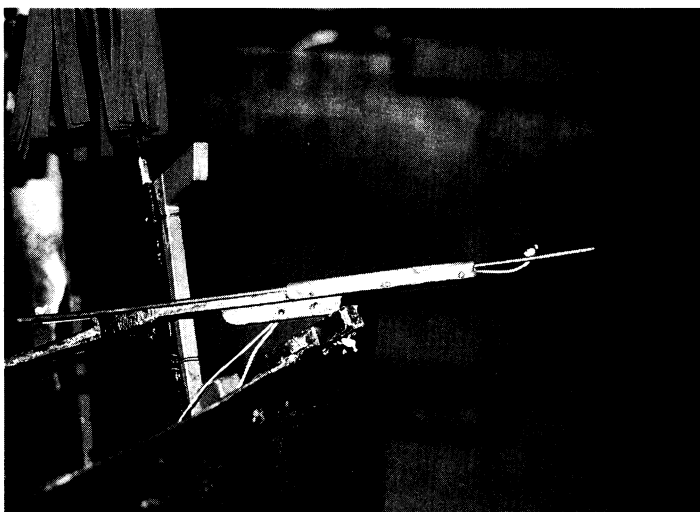


写真10

することで動作しており、この動きを制御するためにさらにストッパーの役割をする糸が設けられていることになる。

四 知盛人形の内部構造

前稿でも指摘したように、知盛の人形は、傀儡師とは別の樋式のからくり台で演技する。そして、そのからくり台そのものがスライド式の機構で上下して、知盛が海中より出現するという場面の演出を可能にしている。知盛の人形の演技で最大の眼目は義経に感みをなして、長刀を振り廻しながら荒れ狂う所作にある。そのために人形にも工夫がなされている。ここでは、知盛の人形の仕組みについて、その構造に即して検討を加えてみたい。

首の左右及び上下

知盛の人形の首も他の小人形の首と同様に左右に動く。知盛人形が樋式のからくり台を左右に移動するとき、首を左右に振りつつ、義経主従に挑みかかる迫力のある所作が演じられる。首の操作は、首の左右に通してある糸によって行なわれる。知盛人形の首を固定してある、箱胴の左右にわたした支柱の左端に、弁慶人形と同様に鯨のぜんまいが巻かれており、この人形の首が上下に動いていた可能性が考えられる（写真11）。現在も首の左右の糸を同時に引くと若干うなずく。

腕の左右及び上下

腕の左右、上下の動作は、弁慶人形と同じ構造によってもたらされる。ただし、知盛人形の場合には、肩板と軸受けの間の腕を差し

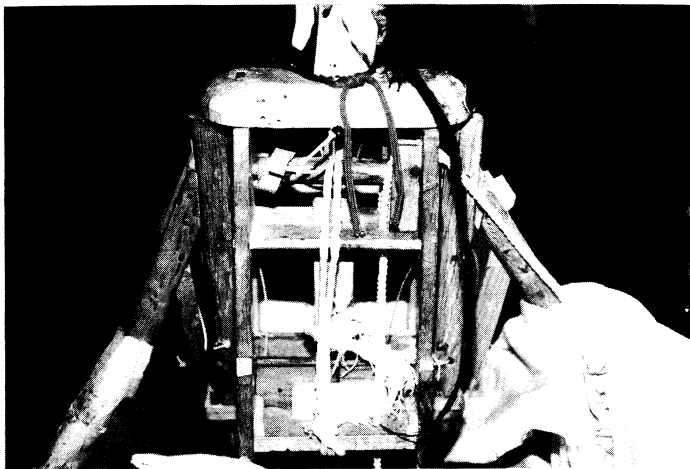


写真11

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造 その二

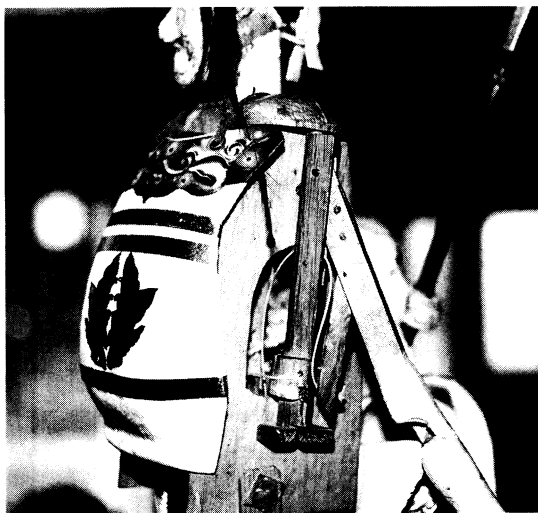


写真12

込んだ主軸が百八十度回転して、腕が前後に動く。そして、その主軸に差し込まれた腕が上下に動作する（写真12）。現在は、この三本の糸をT字形の操作棒に結び付けて、T字形の左右に腕の前後の動きを、もう一本に腕の上下の動きをさせている。これが左右の二本の腕にそれぞれ設けられており、知盛人形は腕の動きに合計六本の糸が設けられている（写真13）。

写真13



長刀の回転

知盛人形の最大の特徴は、長刀を振り回して、義経主従に襲いかかる荒々しい所作にある。これは知盛人形の右腕に仕組まれた回転機構による。

この右腕は、肘の部分で二つにわかれており、肘を曲げて長刀を後方に引きつける動作と腕を伸ばして左右に振る所作、右手の回転といった動きを可能にしている（写真14）。後にも触れるが、回転のための引き糸は一本の糸でつながっており、糸を引くとその勢い

が人形の箱胴の

内部を通って肩

板に仕組まれた

二つの滑車を介

して、右手を回

転させて、長刀

を回す。実際に

は、観客側から

見て左回りに回

転する。糸の水

平方向の回転運

動が右手に通じ

る回転機構で垂

直方向の回転に

転換され、長刀

を勢いよく回す

のであるが、この手の回転運動を円滑にするために、右腕は右の写真のような内部構造になっている（写真14）。糸といってもこの場合には紐といったほうがよいだろう。

写真では、回転機構の部分が肘を曲げた状態になっているが、肘



写真14

を伸ばしたときには、この回転機構の部分が外側の糸を通した滑車部分に接して、この滑車で円滑に糸が引かれるように工夫されている。糸は当然、この方向から引いて、回転させられる。逆に引くと、滑車なしに引くことになるので、糸が摩擦で引き切れる可能性が高くなる。

長刀を勢よく回転させるためには、両手を広げた長さぐらいを一気に引かなければならない。
この糸を引くときには、片方を引きつつ、もう片方を微妙に弛めていかなければならない。つまり、この操作の糸を張った状態にしたまま糸を引かなければならない。完全に弛めて引く

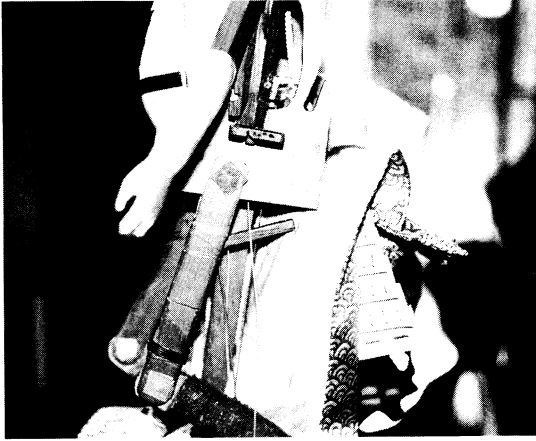


写真15

と、空転することになる。それゆえ、回転した糸を元に戻すためには弛めて糸を反対側に巻きとる。

構造的には単純であるが、実際の演技の上では長刀の回転の表現効果はきわめて大きい。

足踏み

絵画資料に描かれている知盛は、義経主従に立ち向かい、長刀をさまざまに使いながら、謡にあわせて足拍子をとる。田中組の知盛人形の脚部に注目すると、膝の関節で足が曲がるように作られており、大腿部の上部から斜めに細い部材が差し込まれており、その先端には糸を通すための穴が明けられている（写真15）。たとえば、ここに通した操作糸を下に引くと、大腿部が上がりその結果、膝が引き上げられて足が上がる（写真16）。逆に腕の操作糸をこの穴に通して、上から引いた場合には、大腿部が下がり膝がまっすぐに伸びて、緩めると関節が曲がる。これが左右交互に繰り返されるので、知盛が足拍子を踏む所作になる。いずれに

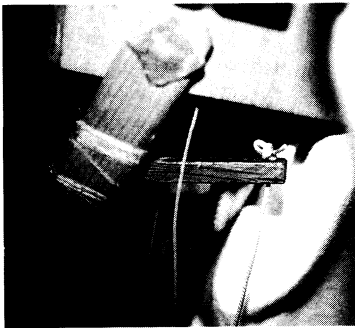


写真16

よつても、知盛の足拍子は可能であるのだが、知盛人形の操作のための基盤の穴が現在使用されているよりも数が多いので、むしろ、足拍子のための糸をそれとして操っていた可能性のほうが高い。いずれにせよ、この脚部の構造は、こうした足拍子を前提に作られたものであることを確かに示している。

五 唐子人形の内部構造

腕の左右及び上下

二体の唐子人形は、傀儡師の箱のなかから登場して、三味線にあわせて両手に持ったチャップパを打ち合わせて踊り、再び、箱のなかに姿を消していく。この人形の動きで注目されるのは、唐子人形のチャップパを打ち鳴らす所作である。唐子人形は普通の状態では、両手を上げたかたちになっている（写真17）。両手を打ち合わせるために左右の糸を引くと、両手が水平に内側に絞られて打ち合わされる。糸を放すと、両手は自動的に元の拡

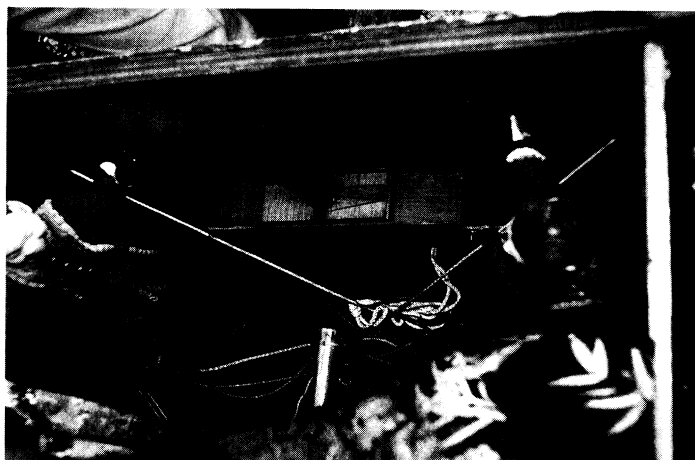


写真17

げた状態に戻る。これは、両腕に仕掛けられたばねの働きによる。ただし、このばねは弁慶の腕のばねとは逆に付けられている。弁慶人形の場合は、糸を引くと腕が左右に開き、糸を放すと元に戻るよう

うにばねを張っているが、唐子人形の場合は、糸を引くと腕が左右に絞られて、糸を放すと元に戻るようになってい

る。これはばねの位置を変えるだけでその動く方向は簡単に変わる。チャップパを鳴らす度にこの糸の操作を繰り返すことになる。

人形本体の上下及び左右

唐子が登場するためには、唐子人形本体が、傀儡師の箱の側面に固定された支柱を、エスカレータのように上昇、下降していくスライド機構が必要であった。支柱の下部には、木製の滑車が二個取り付けられており、支柱に連結している糸を、この滑車を介して引くことになる。唐子人形の場合、他の小人形と異なり、箱の中に納められているので、その操作

は、箱の背後で行なわれることになる。現在は、二体の人形を上下させるために、それぞれの二本の糸を結んで、二体が揃って上下するようにセツトしている。すなわち、引き上げるためには、結び付けてある、それぞれの唐子の上昇用の糸を引く。そして、二体の人形が上に上がると、糸を傀儡師の箱の内に結び付けて固定している。下げるときには逆に下げるほうの糸を引く。

しかも、この唐子が箱の上で方向転換

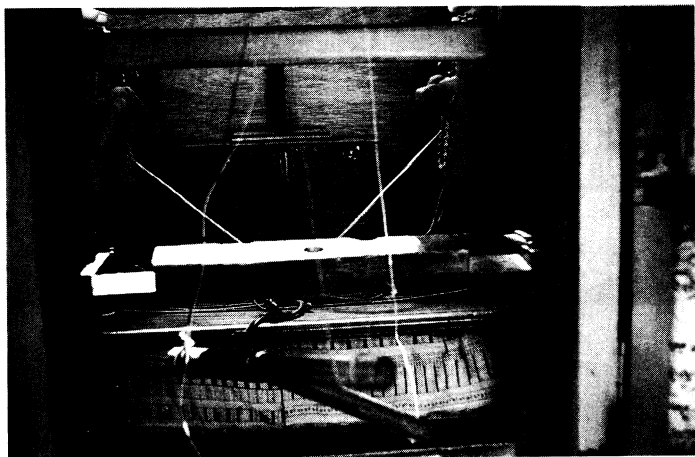


写真18

できなければならぬので、人形の固定台そのものが上下する必要がある。実際に唐子人形はチャップを正面から右、左と方向を変えて打ち鳴らすので、固定台の下に内蔵された滑車で方向転換ができるようになってい（写真18）。滑車には左右二本の糸を固定するための穴が明けられており、この滑車に通された糸を引くと、滑車と直結している人形本体が回転する機構になっている。この糸の操作は人形の動きが見えにくいので操るのが難しく、誤ると唐子同士が対称的な動きをしてくれないことになるので慎重な操作を要する。

六 傀儡師の畳み込みと舟の折り畳み

最後に今回の復元上演の際に、試みた人形の動態の検証例を付け加えておきたい。

まず、この傀儡師のからくりの最も大きな演出効果である、舞台転換についてまとめておく。傀儡師が折り畳まれて、箱の中に格納されていくところの演出であるが、これについては、傀儡師の人形の上半身の本体の内部に組み込まれている、円盤に紐をわたしてその紐の操作で傀儡師の畳み込みと復元を可能にしている（円盤については前稿の写真参照）。円盤の回りには紐を固定するための溝があり、その溝には紐を固定するために打ち付けた釘のあとが残っている。そこで、この円盤の溝に紐を打ち付けてその紐を、知盛の人

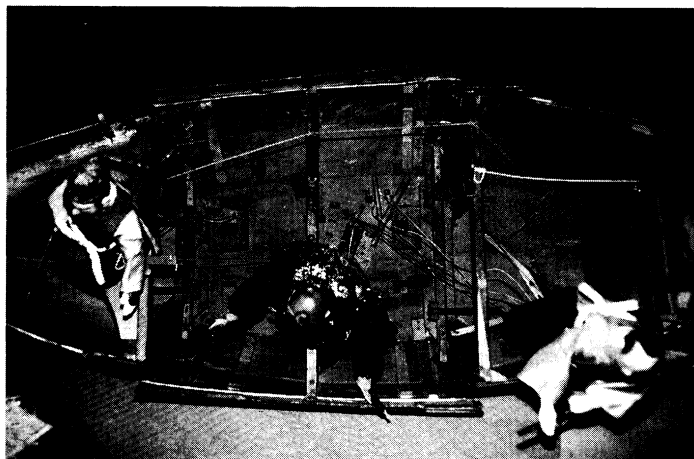


写真19

最後に勢いがつき過ぎて傀儡師の人形に衝撃を与えてしまう。その意味で紐の両側をしつかりと張りながら円滑に回転させていかなければならない。操作を誤らなければ、ゆったりと傀儡師が箱のなか

形の腕の回転機構と同じように両側から引きながら、ゆっくりと円盤を回転させていった。片方の紐だけを引くと、回転の途中まではゆったりとした動きでよいのだが、後半で一気に人形が箱に落ち込んでしまう。

に畳み込まれ、また、ゆったりと元に戻った。現在の伝承では、傀儡師の円盤を固定している内部の骨組みの棒を手で押したり、引いたりして、傀儡師を畳み込んでいる。しかし、先に見たように傀儡師の上半身に内蔵されている円盤の回転を利用すれば、紐の遠隔操作で傀儡師の収納、復元が可能になる。元来、そのように作られていたのである。

また、従来の伝承では、三つ折りの舟は、あらかじめそれを傍らに準備しておいて、遣い手が箱の背後から手で持ち上げて、しだいに舟を引き伸ばして箱の上に舟の姿が現われるように遣っている。しかし、元来、傀儡師のからくりは、傀儡師から舟弁慶、舟弁慶から傀儡師という変化が最も重要な働きであった。その変化の演出は、先の傀儡師の遠隔操作による畳み込みとともに、舟の出現の仕方においても重要であった。すなわち、舟が三つ折りになっているのは、元来、箱の上に出現した三つ折りの舟がこの状態からしだいに左右に開いて、舟弁慶の場面に転換するように作られていたのではないかと推定される。それでは、三つ折りの舟の折り畳まれる両側に付けた糸で操作すればよいのではないかと考えられる(写真19)。ところが、舟を三つに畳むことは糸の操作でできるが、残念ながら舟を開くことはできない。現在の舟にもそうした糸が張られているが、それはあくまで舟がこれ以上開かないようにストッパーの役割をす

る糸であって、この舟の開閉とは関係はない。そこで、さらに舟の各部位を詳細に検討してみると、舟の三つ折りになる骨組みの部材の中に写真のような切れ込みがあり、その切れ込みの両側に明らかに細い軸を固定するための穴が明いている（写真20）。この切れ込みが写真19のように舟の前後についている。これを利用して舟を畳み込んだり、引き伸ばしたりしたであろうことは推測がつく。今回は、竹のひごを利用してみた。すなわち、この切れ込みに竹のひごを固定する把手を付け、ひごを舟の底に明けられている四角の穴に通して、舟の下からひごを押し上げて舟を上げ、畳むときにはひごを引いて舟を引き寄せた。これで舟の開閉の遠隔操作が可能であることがわかった。

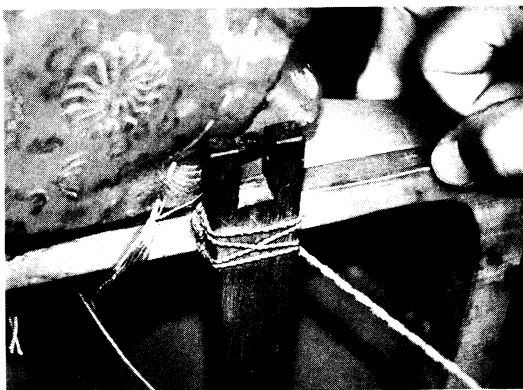


写真20

た。この舟の伸縮装置の素材が竹のひごであるかどうかは別に、こうした機構を備えていればこそ、舟が箱の背後から現われると同時に舟が押し開かれて義経、弁慶、舟子が登場するという演出が可能になる。また、こうした機構を前提にはじめて、舟の底にある四角の穴の意味も、よく理解できる。

唐人人形が傀儡師の箱の中から登場してチャップパを打ち鳴らして踊ったあと、再び箱の中に姿を消していく。その箱の中にさらに傀儡師が畳み込まれ、その箱から、実際には箱の背後から舟が出現するという一連の変化が傀儡師のからくりの醍醐味であった。田中組に伝承されている傀儡師の構造を分析した結果、そうした連続の変化の演出がかつては可能であったということが確認できた。そのために、傀儡師の箱や舟に工夫を凝らし、それぞれの小人形にも微妙な動作ができるように操作糸を組み込んでいる。こうして、現存するからくりの動態と構造から、このからくりの元来の動きを復元しつつ調査を続けてきた。ここで、我々は、からくり人形の動きが現在の伝承を上回ってはるかに繊細な動きを実現していたかもしれないということに留意しておく必要がある。その動きは微妙な糸の遣い方によって左右される。複雑に張りめぐらされた糸を巧みに操作していく、まさに絶妙な糸取りの技が生きていた時代を想定すべきであろう。強からず弱からず、ほんのわずかな力で人形を自在に

操る、鍛えぬかれたからくりの妙技を念頭に置く必要があるのではなからうか。

付記 本稿を成すに当たり、愛知県半田市亀崎田中組の皆さんのご協力、とりわけ、古田龍也氏のご教示に深謝申し上げます。なお、本稿は、一九九三年度同志社大学学術奨励研究の成果の一部でもあります。